

3 カモフラージュとしての化粧品

グラファラボラトリーズ株式会社事業部長

吉田康弘

YOSHIDA Yasuhiro

1 はじめに

外見上の変容は、人々に多くの苦しみや心の傷を与え、社会への参加はもとより、健康な日常生活を送ることすら困難にする。皮膚科領域においては、太田母斑、扁平母斑などの色素性病変、尋常性白斑、白皮症、血管腫、手術跡、熱傷跡など多様な疾患・外傷に伴う外見上の変容が存在する。近年では、がん治療時や治療後の皮膚の色調変化なども対象として含まれる。こうした皮膚に化粧品を用いてカモフラージュを施すことは、単に気になる部分を目立たなくするだけでなく、患者の生活の質(quality of life; QOL)を向上させる効果が報告されており、治療補助としても有用と考えられる。化粧品によるカモフラージュについて、施術例を交えながら紹介したい。

2 化粧品によるカモフラージュ

現代の市場に存在するメイクアップ化粧品は、健康な女性を対象に「魅力を増し、容貌を変える」ことをおもな目的としており、とくにファンデーションは、女性の肌悩みで最も多い顔面のシミに対してカモフラージュ効果を発揮しながら、美しい肌をつくり出す。

こうした美容目的に使用されるメイクアップ化粧品に対して、外見上の変容に悩む人々を対象にメイクアップ化粧品によるカモフラージュを広めたのは、米国のリディア・オリリー夫人である。彼女は幼いころから自身の顔面の血管腫に悩んだ経験をもとに、化学者とともに研究を続け、1928年に「カバーマーク」を開発した。その後、日本には1960年にジャパンオリリー株式会社(現オリリー株式会社)によって導入され、その後、日本皮膚科学会総

会においてデモンストレーションが行われたことから、広く知られるようになったとされる¹⁾。現在は「カバーマーク オリジナル」としてグラファラボラトリーズ株式会社が販売している。このカバーマーク オリジナルを用いたメディカルメイクアップは、リディア・オリリー夫人の掲げた「キャンドル・オブ・マーシイ(慈愛の灯)」の精神を引き継ぎ、現在では2001年に設立された特定非営利活動法人メディカルメイクアップアソシエーション(MMA)によって提供されている。

国内では、1956年に株式会社資生堂が戦禍による熱傷跡に苦しむ人々に向けた国産初のメイクアップ化粧品「資生堂スポッツカバー」を発売し、肌の深い悩みに応えるメイク法を開発したことが、わが国におけるカモフラージュメイクのはじまりと考えられる。その後は、「パーフェクトカバー ファンデーション」を開発し、青み、赤み、茶色み、白斑、凹凸などの肌悩みのカモフラージュに対応している。

このように外見上の変容に対するカモフラージュは、単に気になる部分をきれいに覆い隠すことを目的とするのではなく、化粧療法として悩みを抱える患者の心理的側面にも寄り添い、心のケアや積極的な社会参加が果たせるように支援することも重要な役割となっている。

特定非営利活動法人メディカルメイクアップアソシエーション(MMA)では、東京、大阪にそれぞれ銀座センター、梅田センターを設置し、母斑、血管腫、白斑、手術跡、熱傷跡、がん治療による変色などさまざまな皮膚変色に対して、「カバーマーク オリジナル」(図1)、肌色着色料である「グラファ ダドレス」を用いたメディカルメイクアップを提供している。図2～4にカバーマーク オリジナルを用いたメディカルメイクの実施例を示す。